

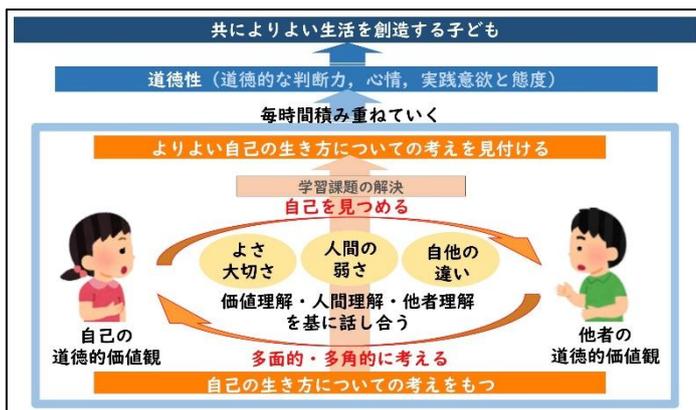
道 徳 科

道徳科部 横尾紗也香 長嶋 愛香 樋口 晃
研究協力者 山崎 雄介

1 道徳科における「教科本質的な学びについて」

自己の道徳的価値観を基にし、他者の道徳的価値観に触れながら、よりよく生きる基盤となる道徳性を育んでいく学び

道徳科の本質的な意義の中核をなす見方・考え方は「様々な事象を、道徳的諸価値についての理解を基に自己との関わりで多面的・多角的に捉え、自己の生き方について考えること」である。この見方・考え方を踏まえ、道徳科の本質的な学びを「自己の道徳的価値観を基にし、他者の道徳的価値観に触れながら、よりよく生きる基盤となる道徳性を育んでいく学び」とした。(図1)本校では、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を目指している。「共によりよい生活を創造する子ども」を育成するためには、道徳科の本質的な学びが欠かせない。なぜなら、道徳科の本質的な学びの中で、道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりすることによって、自己の道徳的価値観の自覚と問い直しが行われ、自己の生き方についての考えが深まり、道徳性が養われるからである。この中で、他者との考え方や生き方の違いに気付くことによって、他者と互いの考え方や生き方を尊重し合い、折り合いをつけていくことが必要であると気付く。そして、一人一人が、社会の多様な価値観の存在を前提に、自己の生き方についての考えを深めていくことで、共によりよく生きていくことができる社会を創造していくことができる。



<図1 道徳科の本質的な学び>

2 研究の方向

道徳科の本質的な学びは、「自己の道徳的価値観を基にし、他者の道徳的価値観に触れながら、よりよく生きる基盤となる道徳性を育んでいく学び」である。教科特性に着目すると、道徳科では、自他の考え方や生き方は人それぞれであるため、理想とする言動を実現することが難しいという人間の弱さや、自他の道徳的価値観や生活経験が様々であることを、互いに受容しやすいのがよさである。一方で、全ての考えや経験が受容されることにより、学習課題の解決に向けた話合いが、自他の考えや経験を聞き合うことにとどまって、自己の生き方についての考えを深められたことを感じられず、自信をなくしてしまうことも考えられる。しかし、自信を深めることができると、子どもたちは、他者との話合いの中で、より自己を見つめたり、多面的・多角的に考えたりするようになり、よりよい自己の生き方についての考えを見付けることができる。よりよい自己の生き方についての考えとは、学習課題の解決を経て、改めてもった自己の生き方についての考えと捉えている。自己の生き方についての考えは、話合いの中で、より実感をもって感じた道徳的価値のよさや大切さ、新たに気付いた自分の弱さや自他の違いを踏まえ、学習課題の解決の前後で、よりよい自己の

生き方に向けて変容しているものと考えからである。このようにして、よりよい自己の生き方についての考えを見付ける学びを積み重ねていくことで、子どもたちは道徳性を育てていくことができる。

そこで、「自信」を深める学びを実現し、共によりよい生活を創造する子どもたちを育成できると考え、研究を進めていくこととした。

3 研究内容

(1) 道徳科における自信

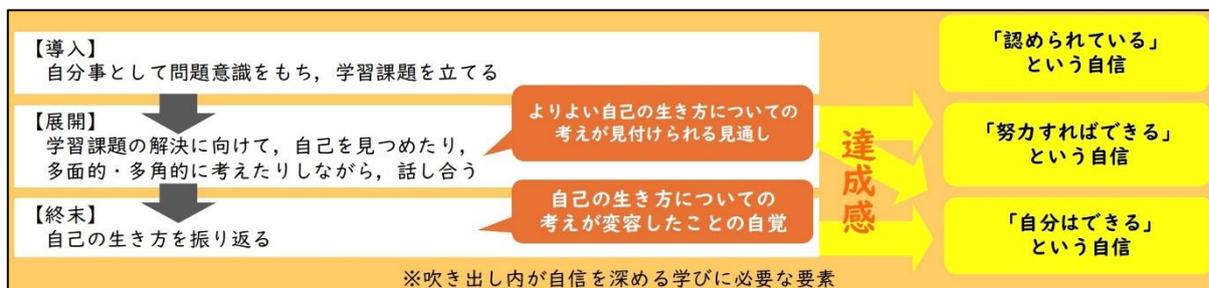
道徳科の教科本質的な学びにおける「自信」を以下の表のように捉えた。

自分ができる	よりよい自己の生き方についての考えを見付けられる。
努力すればできる	葛藤することがあっても、自己を見つめたり、多面的・多角的に考えたりすることで、よりよい自己の生き方についての考えを見付けられる。
認められている	学習課題に関する自己の考えや生活経験について話すと、受け入れてもらえる。

(2) 「自信」を深める学び

道徳科の「自信」を深める学びとは、他者との話し合いを通して、よりよい自己の生き方についての考えを見付けられたという達成感を積み重ねる学びである。

道徳科の問題解決的な学習では、まず、【導入】の過程において、自分事として問題意識をもち、学習課題を立てる。次に、【展開】の過程では、学習課題の解決に向けて、自己を見つめたり、多面的・多角的に考えたりしながら、他者と話し合う。そして、【終末】の過程において、自己の生き方を振り返る。「自信」を深める学びを実現するには、子どもたちが達成感を積み重ねていけるよう、この学習過程に新たに二つの要素を加えることが必要であると考えた。(図2)



<図2 自信を深める学びに必要な要素>

一つ目の要素は、【展開】の過程で、学習課題の解決に向けて話し合う際に、よりよい自己の生き方についての考えが見付けられる見通しをもつことである。見通しをもつと、自己を見つめたり、多面的・多角的に考えたりしながら自分たちで話し合いを進め、自らの力でよりよい自己の生き方についての考えを見付けられたという達成感を感じ、「自分ができる」という自信を深められる。また、話し合いの中で葛藤することがあっても、見通しをもっていることで、よりよい自己の生き方に向けて自分たちで話し合いを進めることができ、「努力すればできる」という自信を深められる。二つ目の要素は、【終末】の過程で、自己の生き方についての考えの変容を自覚することである。子どもが、より実感をもって感じた道徳的価値のよさや大切さ、新たに気付いた自分の弱さや自他の違いを踏まえてもった自己の生き方についての考えは、よりよい自己の生き方に向けて話し合いの前より変容していると捉え、その変容を自覚することで、よりよい自己の生き方についての考えを見付けられたという達成感を感じ、「自分ができる」という自信が深まる。

(3) 「自信」を深める学びに求められる子どもの様子

道徳科における「自信」を深める学びに求められる子どもの様子を問題解決的な学習の過程に沿って表すと以下ようになる。

問題解決的な学習の過程	求められる子どもの様子
【導入】の過程	【自分事としての問題意識】 ・教材中の出来事と自分とを照らし合わせ、違いに気付いたことを発言したり、その発言にうなずいたりしている。
【展開】の過程	【自分事としての話し合いへの関わり】 ・学習課題に関する自己の考えを、堂々と友達に話したり、悩みながらも話したりしている。 ・学習課題に関する自己の経験を話したり、友達の経験に共感したりしている。 【よりよい考えを見付けることへの期待】 ・うなずいたりあいつちをうったりしながら、友達の話を聞いている。 ・葛藤することがあっても、多面的・多角的に考え、話し合い続けている。
【終末】の過程	【自己の考えの変容の自覚】 ・これまでの生き方やこれからの生き方について、本時の話し合いを通して気付いたことを踏まえて記述したり、話したりしている。

(4) 学びのデザイン

① 「自信」を深める学びを実現する学びのデザイン

「自信」を深める学びを実現するために、以下のデザインを構想した。

【話し合いの視点の活用】

「自信」を深める学びでは、【展開】の過程で、学習課題の解決に向けて話し合う際に、よりよい自己の生き方についての考えが見付けられる見通しをもつことが必要である。しかし、これまでの実践では、自分たちで話し合いを始めても、互いの考えを発表し合うことで満足してしまい、自己の生き方についての考えが深められないことがあった。そこで、「自信」を深める学びの実現のために、話し合いの視点を活用するというデザインを行う。子どもたちが学習課題の解決に向けて話し合う際に、自己を見つめたり、多面的・多角的に考えたりすることができる話し合いの視点を提示し、これを基に話し合いを進めることを促すことで、自分たちの力でよりよい自己の生き方についての考えを見付けることができ、「自分はできる」「努力すればできる」という自信が深まると考えた。

話し合いの視点としては、「〇〇の気持ち」「自分だったら」「自分の経験」「難しいとき」という4つの視点を設定する。活用の仕方や期待される効果、活用場面の想定は以下のとおりである。

視点	活用の仕方	活用により期待される効果	活用場面の想定
〇〇の気持ち	子どもが、〇〇の中に、主に教材の登場人物の名前や立場を入れて考え、話し合う。高学年では、教材に登場しないが、主人公との関わりが想定される人物の立場が入ることも考えられる。	多面的・多角的に考える	ある一人の登場人物の立場からの話に終始しているとき
	【〇〇に入る言葉の例】ぼく、△△さん、された側、した側、周りの人たち		
自分だったら	子どもが、自分とは異なる立場の人の気持ちや行動の可否を、自分に置き換えて考え、話し合う。	自己を見つめる	教材の話に終始しているとき
	【例】自分が〇〇の立場だったら、この場面では、～と感じる/～と行動する。		
自分の経験	子どもが、自分や他者の考えの根拠にある生活経験を想起し、話し合う。	実生活と結び付く自己を見つめる	教材の話に終始したり、具体性に欠けたりしているとき
	【例】自分も登場人物と同じような場面を経験したときに、～と感じた/～と行動した。		
難しいとき	子どもが、理想とする言動の難しさを感じる場面を考え、話し合う。	自己を見つめる多面的・多角的に考える人間の弱さに着目し、葛藤を促す	よさばかり話しているとき
	【例】周りが気付いていなかったら/忙しかったら/過去に相手から嫌なことをされていたら		

これまでの実践から、この視点を子どもたちが活用していく際は、発達段階や学級の実態に応じて、4つの視点を教師が具体化して提示する必要があると考える。例えば、「〇〇の気持ち」は、「この場で〇〇はどう思っていたかな?」、「自分だったら」は「この場で自分が〇〇だったらどう思う?」「この場で自分が〇〇だったらどうする?」などである。

また、これらの視点を子どもたちがいつでも活用していけるよう、学習シートに組み込む。子どもたちは、これらの視点を活用しながら話し合いを進め、自己の考えを深めたり広げたりしていきながら学習課題について考えることで、学習課題を解決することができる。そして、学習課題の解決を踏まえた上で、改めて自己の生き方について考えることにより、よりよい自己の生き方についての考えを見付けることができる。

【自己の生き方についての考えの変容を可視化する学習シート】

「自信」を深める学びでは、【終末】の過程で、自己の生き方についての考えの変容を自覚することが必要である。これまでの実践では、話し合いの前に「学習課題に対する考え」を記述し、終末に、再度「学習課題に対する考え」と「今日学んだことやこれからの生活についての考え」を記述していた。(図3)しかし、学習課題に対する考えは、それぞれロイロノート上の別のシートに記述し、話し合い前後での比較を促すこともなかったため、考えの変容を自覚しにくかった。また、自己の生き方についての考えは、話し合い前の記述がなかったため、話し合いを経ての考えの変容を自覚しにくかった。

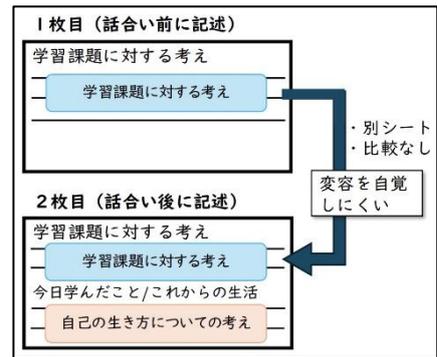
そこで、「自信」を深める学びの実現のために、自己の生き方についての考えの変容を可視化できる学習シートを用意するというデザインを行う。(図4)この学習シートは、授業の事前や導入に、これまでの自己の生き方について考えたことを記述する欄を新設した上で、一枚のシートに、一単位時間の自己の考えの記述をまとめられるようにしたものである。学習シートの上部には新設した記述欄を、学習シ

ートの下部には、授業の終末で、改めてこれまでの自己の生き方を見つめて考えたことを記述する欄を設ける。そして、この二つの欄に記述した考えを比較するよう促すことで、自己の生き方についての考えの変容に気付けると考える。また、このシートを友達と見合い、互いの考えの変容を認め合うことで、「認められている」という自信が深まる上、変容を自覚することでより達成感を味わい、「自分はできる」「努力すればできる」という自信を深められると考える。

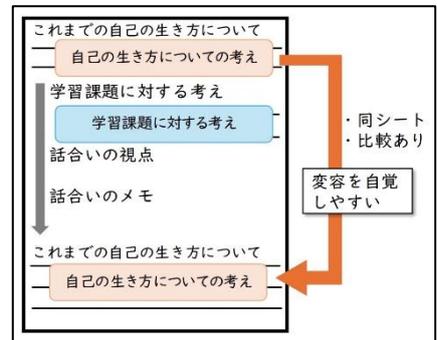
②教師の関わり

「自信」を深める学びでは、学習課題の解決に向けて友達と話し合う場面で、子どもたちが話し合いの視点を活用しながら自ら話し合いを進めていくと考えられる。

そこで、「自信」を深める学びにおける教師の関わりを次の表のように想定した。なお、表中における「●」は話し合いの視点を有効活用するための関わり、「◎」は「認められている」という自信を深めるための関わり、「○」は自己の考えの変容の自覚を促す関わりである。



＜図3 今までの学習シート＞



＜図4 新たな学習シート＞

展開	<ul style="list-style-type: none"> ●グループでの話合いと全体共有を切り替えるタイミングの提示 ●話合いの視点の転換の促しや、活用例の提示 ◎学習課題に関してもった考えに対する共感 ◎人間の弱さに触れた発言に対する共感と価値付け <ul style="list-style-type: none"> 「そういうときってあるよね。先生もなかなかできないことがあるよ。」 「自分の弱さにちゃんと向き合えたね。とても大事なことだね。」 ◎他者理解を示した子どもへの価値付け <ul style="list-style-type: none"> 「少しずつみんなの考え方が違うんだね。でも、そうやって違いを受け入れながら話していくと、考えが広がるね。」 ●話合いの視点の活用の仕方についての問いかけと価値付け <ul style="list-style-type: none"> 「強く納得した考えを、視点と一緒に教えてね。」 「その視点で話し合ったから、～～に気付けたんだね。」
終末	<ul style="list-style-type: none"> ○考えの変容や、自己を見つめられたことに対する価値付け <ul style="list-style-type: none"> 「今日の話合いで、～～のよさに気付けたんだね。よりよい生き方につながられそうだね。」

【具体例】6年 真心ある行動（内容項目A「正直、誠実」）『本屋のお姉さん』（公文書院）
 学習課題：どうして忙しいときでも誠実な対応をするのだろうか

【話合いの視点の活用】

話合いの視点	子どもたちの話合いの様子	教師の関わり
<p>気ばくの気持ち</p> <p>自分だったら自分が「おばくさん」だったときの気持ち</p> <p>「おじさん」の気持ち</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●お姉さんが注文した本を届けに駅まで追いかけて行ったのは、ぼくに喜んでもらいたかったからだと思うな。 △うん、「ぼくの気持ち」で考えてみると、ぼくはすごく嬉しかったと思うよ。 □そうだね。雨の中なのにわざわざ届けてくれて、ありがたいな、なんていい人なんだろうって思ったと思う。 ●私だったら、ずっとその本屋に通いたくなるな。 △たしかに、私もその店員さんに会いたいから通いそう。そうか。誠実にすると、人といい関係が築けるんだね。 □でもさ、逆の立場から考えると、自分が「お姉さん」の立場だったら、そこまでしないと思うな。本が見付かったら、後で「見付かりました」って電話で連絡するのでもいいと思うけど。 ●たしかに。追いかけて行っても、ぼくに会えるかどうか分からないしね。 □そうそう。雨の中追いかけていくのは大変だし。 △そうだね。私も、雨に濡れるのは嫌だから、そこまでしないかもしれないな。 □大変なときや面倒なときは、そこまでしないよね。 ●それに、お店を離れてまたおじさんに怒られるのが心配。 ○たしかに。おじさんが怒る可能性もあるのか。おじさんって、お姉さんのしたことをどう思ったんだろう。 △もしお店が混んでいて、他の店員さんもいなかったら、お姉さんがいなくなると、おじさんは困ったよね。 □うん。そんな状況だったら、お姉さんのしたことは、誠実と言うより、迷惑だよ。 ●おじさんは、ちゃんと仕事してって思ったよね。 ○おじさんとお姉さんの関係も悪くなりそう。 □でも、ぼくに対してはちゃんと仕事しているし、ぼくからは信頼を得て、関係はよくなりそう。 ●うーん、この状況で誰に対しても誠実でいるって難しい。 	<p>【価値付け】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●さんも○さんも、「たしかに」とか「そうそう」ってうなずきながら聞いているの、いいね。人と違う考えでも安心して話せるね。 <p>【共感】</p> <ul style="list-style-type: none"> 先生も、怒られるのは嫌だな。 <p>【価値付け】</p> <ul style="list-style-type: none"> いろいろな人の立場から考えられていていいね。 <p>【視点の活用例の提示】</p> <ul style="list-style-type: none"> そんな風に、誠実だと思った行動が、他の人からしたら誠実じゃなかった「自分の経験」ある？

【自己の生き方についての考えの

変容を可視化する学習シート】

授業の事前に、自分の誠実さについてこれまでの自己の生き方を振り返り、シートに記述しておく。そして、授業の終末に、再度これまでの自己の生き方を振り返る。授業前の考えと比較し、それを友達と共有することで、自己の考えの変容に気付く。

○月×日 「本屋のお姉さん」

これまでの自分 友達のことを思っ て声をかけたり、助けたりすることができている。自分に余裕がないときは できないことがある。

学習課題 どうして忙しいときでも 誠実な対応をするのだろうか

自分の考え 相手も喜んでくれるから

視点

●○○の気持ち ●自分だったら ●自分の経験 ●難しいとき

心が動いたこと

おじさん ちゃんと仕事して 迷惑、信頼できない

ぼく なんていい人なんだろう 雨だし、おじさんにぶつかるかもしれない...

念えるか 余裕がなし

誰にしても 誠実でいるのは難しい

これまでとこれからの自分

大変なときや 少いめんどうなときは できないこともあつたけれど、だいたい心は 自分一人に対して 誠実だと思つてしまつた。でも、今まで考えながら 人の立場から見ると、自分は 誠実ではないこともあつたかもしれない。周りの人の立場に立って行動していきたいです。

4 成果と課題

本校道徳科における問題解決的な学習の中で、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成に向けて、「自信」を深める学びのデザインについて研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

○成果

学びのデザインで、話合いの視点を活用したことによって、話合いの進め方の学習方略を獲得し、視点を焦点化しながら自分たちで話合いを進めていくことができた。また、学習シートの構造を工夫し、話合いの前後での考えを比較したことによって、話合いの前の自己の考え方や生き方を踏まえた上での記述が多く見られるようになり、自己の考えの変容に着目するようになったことが伺えた。

これらの結果、自ら自己の考えを話すことが少なかった子どもが自ら話す姿が多く見られるようになったり、授業後にも、授業を通して考えたことや、自己の考えの変容を教師に伝えに来る子どもが出てきたりするようになった。2つの学びのデザインにより、よりよい自己の生き方についての考えを見付けられたという達成感を得ることができ、「自信」を深めることができたからだと考える。

○課題

子どもたちが学習課題の解決に向けて話し合う様子を見てみると、話合いの視点があることによって、停滞せずに話し合い続けることができるものの、視点を決定したり変えたりする根拠が見えない場面があった。それによって、考えが深まらないまま話合いの視点を変えていたり、考えの深まりとは遠い視点を活用していたりすることもあった。教師は、発達段階に応じて丁寧に活用の仕方を取り上げたり、視点を有効活用しながら自己のよりよい生き方につながる考えを見付けられたことを称賛したりするなどして、有効な活用の仕方が身に付くように関わり続けることが大切だと考える。また、子どもたち自身で話合いを進めていけるようになると、グループでの話合いに任せる時間が長くなるため、その後の、学習課題に関する考えを全体共有する時間や、学習シートに振り返りを記述する時間が不十分になってしまうことがあった。グループで話し合っている間に、それぞれのグループの考えが全体に自然と共有されるよう、教師が発言を拾って広めたり、板書で可視化したりするなどして、全体共有する時間を短くする工夫が必要であると考えます。

【参考文献】

- ・浅見哲也，安井政樹（2023）『道徳授業の個別最適な学びと協働的な学び』明治図書．
- ・浅見哲也（2021）『道徳科授業構想グランドデザイン』明治図書．